

僕たちがこの小屋にきて七日目の朝。
マリーが外へ出てくると同時に、すべての作業が終わった。
——道が、開いた。

「おはようございます」

「おはよう、マリー。終わったよ」

「……はい、ありがとうございます」

開通した道を見つめたマリーは、言葉をこぼす。

「私……魔女になりたくない」

心のどこかで、僕は、その言葉を待っていた気がする。

「だから、ここから逃げようと思うんです」

「うん。じゃあ行こうか」

「え？」

「逃げるって言ったよね」



「はい。でも、これは私の問題で……スミレを巻き込むわけにはいきません」



「マリーが一人で逃げられるとは思えない」

「それは……」

「だから一緒に行くよ。僕の体があれば、逃げ切れるはずだ」

「それは！ スミレの魔法を利用していることになりま
す」





「いいよ。君のためなら。それにこの体を使うのははじめてじゃない」

僕は自らが開いた道を見る。

「あとは君次第だよ。マリー」

手を差し伸べた。

マリーは迷っているようだったが、やがて、腕を持ち上げる。

「本当にいいんですか。スマレ」

「僕は僕の意味でマリーと一緒に行くことを選んだんだ」

「わかりました。本当は、私もスマレと一緒にうれしいんです」

「うん」

触るよ、そう伝えてから、マリーを横抱きにした。

「わっ、待ってください。荷物をまとめていませんし、スマレの絵がまだ部屋に！」

「また描くよ。逃げるなら早いほうがいい」



「そうですけど！ 絶対また、描いてくださいね」

「もちろん」

「それから、ご飯も……作ってくださいね」

「わかったよ。ほら、口を閉じて。舌かむよ」





彼女を抱えたまま、開通したばかりの道を走っていく。
ぎゅっと僕の首に腕を回すマリーを見て、速度を上げた。



行先はわからない。
けれど、僕たちならどこまででも行ける。




スマレのおかげで無事に司祭や教会から逃げ切ることができた。
けれども、どこかに定住したら見つかってしまうと思い、
私たちは各地を巡った。
スマレは絵を描いては売り、私は人々に字を教えて生活していた。

スマレのご飯を食べて、スマレの描く絵を見て。
しかし、そんな穏やかな生活も永遠には続かない。
魔法のせいで成長が遅い彼は、何十年経ってもほとんど変わらない。
対照的に、私の体はどんどんと老いていく。
声はしわがれ、手はシワだらけ。
時が経つごとに、足腰も弱くなり、長距離を移動することも難しくなってきた。

「今日はたくさん絵が売れたんだ。個展も決まったよ」
「マリー、見える？　すごいきれいな星空だ」
「大雨が降ってるね。あの日の夜を思い出すよ」





そうして、やさしいスマイルの声だけが、私の世界になった。
あの日。

魔女になっていたら、もっともっとスマイルと過ごしていられたんだろうな。

魔法を扱う者は長生きだ。

でも、その選択を捨てたのは自分自身。

私に悔やむ資格などはなく、けれども、不死に近いスマイルを置いて逝くことが、たまらなく悲しかった。



マリーは日に日に弱っていく。

ご飯を食べることも、隣で絵を眺めることもできなくなった。

ベッドで眠り続ける彼女の近くにキャンバスを置き、ありのままを描いていく。

彼女はきっと、こんな姿を残してほしくはないと思うけど。

君という時間はかけがえのない、いとおしいものだ。

これからも長い時を生きていく僕には、どんな思い出も、必要だった。

「マリー。いつだって君は、きれいだった」

僕の言葉が届いたのだろうか。

もうほとんど動かないマリーの唇が、弧を描く。

そうして、あの小屋で、何度も聞いた言葉が聞こえる。





ありがとうございます。スマレ、おやすみなさい。

「うん。……おやすみ、マリー」

君を看取ることができてよかった。

マリーに教えてもらった字、マリーとともに考えたサイン
を絵の端に書いた。

筆をおろすとともに、涙もゆっくり、落ちていった。

ED3【不老の画家が愛した老婆】

